琉球大学学術リポジトリ

現実を映す鏡としてのYouTube教材と言語活動の可能性：認定講習コミュニケーション科目におけるセサミストリート

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学大学院教育学研究科 公開日: 2021-04-16 キーワード (Ja): キーワード (En): Listening, Speaking, Communication activity, Authentic materials, ICT 作成者: 東矢, 光代, Toya, Mitsuyo メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/48199

【実践報告】

現実を映す鏡としてのYouTube教材と言語活動の可能性
―認定講習コミュニケーション科目におけるセサミストリート―

東矢　光代*

YouTube as Effective Teaching Materials that Reflect the Reality: Activities with *Sesame Street* in English Communication Class as a Part of Certified Course

TOYA Mitsuyo*

Abstract

This paper reports the use of *Sesame Street* videos on YouTube as a promising English teaching material for Japanese elementary school teachers as a part of the in-service certified course for junior high school English teaching license. Since the Course of Study released in 2018 states that English becomes a compulsory subject for 5th and 6 graders at the primary school level in 2020, it has been an urgent and critical mission for all concerned to secure a sufficient number of qualified teachers who are capable of conducting English class to elementary school children. Therefore, the author has been involved in the administration of the certified course that trains in-service teachers and this year, offered a class for English oral communication. Due to the severe influence of COVID-19 pandemic, only three teachers participated in the class; however, the class enjoyed authentic communicative activities even with facial masks and social distancing. The author designed the language activities based on two YouTube movies with the topics of "Heroes in Your Neighborhood" and "Meeting Julia". The materials were found appropriate as they refer to the real-life situations, i.e., the COVID-19 pandemic and acceptance of various behaviors such as of autism. Under the circumstances, the needs for publicly available online materials, both for teaching and learning, will increase in the future. The current report shows a practical example of such ICT use for a teacher training classroom.

Keywords: Listening, Speaking, Communication activity, Authentic materials, ICT

１．はじめに

平成29年３月に公開された新学習指導要領（高校は平成30年）は，「主体的，対話的で深い学び」を志向し，今年度（令和２年度）が小学校全面実施の年にあたる。この新学習指導要領で最も大きな変化を求められるのが，小学校英語教育である。新学習指導要領の実施に向けては，審議会の論点整理の中でも，小学校外国語活動の早期化（３年生より実施）並びに英語の教科化（５，６年生）が改革の大きな柱であることが明確になっており，移行期間の平成30年と平成31年／令和元年には，５・６年生用の移行教材「We Can! １＆２」に基づいた授業も実施された。

小学校での英語の早期導入化，教科化が抱える最大の課題は，「誰が教えるのか」という問いと，教える教員数の確保であろう。そのため，全国・各都道府県において，現職の小学校教員に中学あるいは高校の英語免許の取得を進める動きがある。実際，文部科学省による令和元年度英語教育実施状況調査の結果を見ると，小学校教師のうち中・高等学校英語免許状を所有している割合は，前年度の5.9％か

* 琉球大学国際地域創造学部国際地域創造学科国際言語文化プログラム (Faculty of Global and Regional Studies, University of the Ryukyus)

ら0.4ポイント上がり，6.3％となっていた。沖縄県でも「平成28年度小学校英語教科化に向けた専門性向上のための講習の開発・実施事業（代表：大城賢）」に琉球大学が採択され，県教育委員会と連携し，３年間にわたり，現職小学校教員を対象とした中学校英語２種免許認定講習を実施した。同事業は令和元年より，沖縄県教育委員会主催となり，琉球大学の教員が主に講師を務めながら，認定講習を実施している。

今年，令和２年度は，教科としての小学校英語実施の初年度であり，現場の小学校英語教育に大きく貢献することを期待していたが，奇しくも新型コロナウイルスの世界的な感染状況により，国際的な人の往来もままならず，学校現場も長期の休校と，その後の対応による不規則・不安定な学年暦を強いられることになった。誰も予想だにしなかった2020年の世界だが，危ぶまれた認定講習は，奇跡的に実施することができた。

本稿では，筆者が2020年８月に担当した「英語コミュニケーション演習」における担当２コマでの実践を報告する。新型コロナの影響を受け，大学での授業は前期全て遠隔対応となり，半年間まともな対面授業から遠ざかっていた中，マスクを着用し，社会的距離を保った英語コミュニケーション活動を対面で実施したことは，貴重な体験であった。特に本実践報告では，コロナの影響により急速に加速しているICTやインターネットの活用も視野に入れ，YouTube動画の中から，セサミストリート（Sesame Street）を題材として扱うことで，自らの現場実践に資するコミュニケーション活動を，受講者である教員自らが体験するという，教職課程における英語のコアカリキュラム（東京学芸大学，2015年）の趣旨にも基づいている。

２．本実践を読み解く視点

本実践での授業を設計する際に意識した概念は,「真正性（authenticity)」,「動機づけ（motivation)」,「学習の自律・継続性（autonomous learner)」の３つである。これらは独立に存在するのではなく，実践においては相互に絡み合っているが，以下，Harmer（2015年）を参考に，簡単に説明したい。

まず，真正性にはテーマや教材の真正性とタスク（活動・課題）の真正性がある。今回のような，誰も体験したことのないパンデミック下において，何事もなかった平時のように，コロナの影響を考えずにコミュニケーション活動を行うことは，現実世界を無視していると言わざるを得ない。したがって，英語のコミュニケーション活動においても「今･ここ」を大切にし, 受講者の日常に直結するようなテーマ, 今の現実, あるいは教師としての日常を表現できるようなテーマや教材, 活動を軸にしたいと考えた。

現実と直結した真正性の高いテーマ・教材・タスクは，学習者の動機づけを高める。表現できることが言語力の不足によって制限される英語での活動であっても,「ことばを使う」という特質を考慮すると，最優先されるべきは，学習者が知りたいことを知るため，また，伝えたいことを伝えるために英語の活動を行うことであり，そうすることで，学習者の興味関心が高まり，学習意欲・動機づけにつながる。そのようなテーマを選び，言語レベル的にも興味関心においても適切な題材を準備し，学習者が表現したいことを表現させる活動を設定することが，本講習にも求められていた。

３つ目の学習者の自律性については，講習終了後も英語の学習を継続できる情報提供をすることにより，受講者が学習意欲を高めたまま，さらに英語を学びつつ教える手段を提示したいと考えた。具体的に，本実践では，公開されているYouTubeの教材を，教室外でも使える学習題材として紹介し，リンク情報を共有することで，今後の持続的な学習につなげたいという思いを持った。忙しい現場で自らの英語力も高めつつ，児童に英語を教えることを期待されている受講者たちにとっては，空いた隙間時間でインターネット動画を見るという学習方法を今回のクラス内実践で提示することが，今後の英語学習において，受講者たちの自律性を高めるであろうことを期待したのである。

３．題材の設定

本科目の授業設計は，コロナ禍の影響を抜きにしては語れない。講習期間は７月21日から８月27日で，英語科教育法１科目，教科に関する科目５科目，教職に関する科目２科目を開講した。すべて２日間の講習（８コマ）を基本とし，１単位の認定科目であった。沖縄県の新型コロナウイルス感染状況は，2020年７月第４週から予断を許さない状況となり，８月に入ってからの対面実施も危ぶまれる状況であった。しかし，受講生が最大６名，少ない科目では１名という実態と，40名教室の利用を確保していたことから，すべて予定通りに実施することができた。

筆者が担当した「英語コミュニケーション演習」は４名のオムニバスで担当し，筆者はトップバッターとして初日の最初２コマ（１コマは90分）の担当であった。本講習の趣旨は，現職小学校教員が中学校英語２種免許を取得することにより，今年度から全面実施となった新学習指導要領に基づく小学校英語の早期化，教科化に対応できる人材の育成である。通常であれば，コミュニケーション科目ではオーラルコミュニケーション，特に受講する教員のスピーキング能力を向上させるために，ペアワークやグループワークを多用するところである。しかし，３名の受講者とはいえ，大学内では原則すべての授業が遠隔での実施である状況の中で，マスク着用と社会的距離を確保したペアワークやグループワークは初めての試みであり，実施前にはイメージしにくいものであった。

そこで活用を考えたのが，ビデオ題材である。オーラルスキルの中でも，通常よりもリスニング活動の比率を上げることで，教授者・受講者双方について，発話による感染リスクを下げられると考えた。特にYouTubeは英語教育に資する動画が豊富であり，それを活用した授業の実施は，教職課程のコアカリキュラムでも望まれている「教授する際にモデルとなるようなコミュニケーション活動を，自ら学習者として受講する」経験につながる。そして，本講習で担当した２コマで取り上げたのが「セサミストリート」である。

セサミストリートは，1969年からアメリカで放映されている子ども用の教育番組であり，日本でもかつてNHKの教育チャンネルで放送されていた。キャラクターは，ぬいぐるみやグッズでも一般的によく知られているが，その登場人物やエピソードは現実の社会情勢を反映している。例えば，ロジータというキャラクターはメキシコ出身の英語とスペイン語のバイリンガルであり，妖精のアビーは両親が離婚，母親が再婚して父親が異なる弟がいる，といった具合である。本実践で取り上げた動画に登場するジュリアは，自閉症を抱える女の子のパペットである。セサミストリートの世界に見られるのは，社会に存在する「多様性」への配慮であり，アメリカ社会の中で子どもたちが抱える問題を，子どもを対象とする番組の中で丁寧に描いていると捉えることができる。言語的には，英語を母語話者とする子どもが使う英語，語い，文法構文で構成されているため，小学校で英語を教えることを目指す本講習の受講生には適切な難易度だと言える。ただし，「子ども用だから易しい」と考えるのは短絡的で，英語を母語としない学習者にとっては，子ども特有の発音の聞き取りにくさや，大人の学習者にはなじみのない遊具や動物などの生活語いが頻出するのも特徴的である。その一方で「真正性」という観点で見れば，子どもの生活，社会（世界）を映し出し，リアルタイムの興味関心に基づいていることは，題材としての大きな強みだと言える。

実際に授業で取り上げた動画は，「①コロナ禍でのエッセンシャルワーカーへの感謝」と「②自閉症の女の子ジュリアとの出会い」である。以下，それぞれの特徴と意図した学習効果（ねらい）について述べる。

① １つ目のYouTube動画は，コロナ禍の中でも一生懸命働いてくれているエッセンシャルワーカーをSuperhero in the neighborhood（身近なスーパーヒーロー）としてその仕事内容を紹介し，感謝の言葉を述べる内容で，繰り返しを基調とした歌を中心とした動画である。登場するのは，エルモ，アビー，グローバーである。ここで取り上げているエッセンシャルワーカーは，E.M.T（救急救命士），

grocer（スーパーマーケットの店員），doctors and nurses（医者と看護師），pharmacist（薬剤師）であり，それぞれの業務内容や関連する英語の語句が歌詞に盛り込まれている。エルモ，アビー，グローバーの会話として口語的なやり取り部分もあり，2020年８月時点で「話したくなる」タイムリーな話題であったし，こども目線で「エッセンシャルワーカーへの感謝を表現する」という内容は，受講者である小学校教員の日常で取り入れやすい（参考としやすい）内容だと判断した。

② ２つ目は，自閉症の女の子ジュリアに，ビッグバードが初めて会った時のエピソードである。セサミストリートでエルモとアビーが，ジュリアと一緒にお絵かきをしているところに，ビッグバードがやってくる。初めて会うジュリアに，ビッグバードが「絵を見せて」と話しかけても，ジュリアは返事をしない。その場はジュリアの行動の特色を知り適切な働きかけをするアランの助けにより，ジュリアとコミュニケーションは取れたが，落ち込むビッグバードにアランは，彼女が自閉症であり，コミュニケーションのスタイルが異なることを伝えようとする。気を取り直したビッグバードは，エルモやアビーとともに，ジュリアが始めた「ぴょんぴょん鬼ごっこ（Boing Tag)」を楽しもうとするが，今度はサイレンの音に過剰反応したジュリアが頭を抱えパニックを起こしてしまう。この動画では一貫して，アランがジュリアのよき理解者として，自閉症の子供が見る世界をビッグバードに伝え，またジュリアを落ち着かせる役割を担っている。すでにジュリアの友人であるエルモとアビーの見方も，配慮の必要な子どもを受け入れる際の，あるべき姿を示している。これらの内容には，視聴する側の現実社会においての自閉症の理解を促す意図と，多様性の受容への配慮が感じられ，日々このような児童への対応に心を砕いている小学校教員にとっても，適切な学習内容であると言える。

４．授業実践内容

上記の２つのYouTube動画を核として，授業実践の内容を，１限目を「コロナ禍の生活について」，２限目を「個の多様性の理解と配慮」と位置づけた。YouTubeの動画題材を用いつつ，その前後に言語活動を配置する実施案を策定したが，直前や当日の対面型言語活動が制限される場合に備えて，バックアップ用の動画リンクも準備した。もし感染予防の観点から，受講者の発話活動を減じたほうがよいと教師が感じた場合は，コミュニケーション活動を減らして，動画視聴中心に切り替えるつもりのバックアップである。①のテーマについては，バックアップ用として「Practicing Social Distancing with Abby and Rudy（約２分)」，②のテーマについては「Starfish Hug（約３分)」を準備し，当日の教室環境状況や進度により，必要があれば授業内容として展開できるようにした。ここからは，実際に行った授業実践内容を，受講者の反応についての行動観察を交えて報告する。

４．１　１限目（テーマ①）

⑴　Ice-breaking活動

本講座の受講者は現職小学校教員３名であった。40名収容の教室にマスク着用の上，２メートル程度離れて着席してもらった。教師は口元が見えるクリアマスクを着用し，原則教室前の教卓から話す形で授業を進め，言語活動の際には３名の受講者から離れた教室内の席に座って，十分な距離を取りつつ，４名グループで話し合うような形式を取った。なお，２コマの筆者担当部分は基本的にAll Englishで進め，受講者が言いたい表現の英訳や，受講者にわかりにくいと思われる語句のみ，口頭で日本語を添えた。

Ice breakingは初めて会ったメンバーがお互いを知り，その後の協働活動を円滑に行えるようにするための自己紹介活動である。今回は，小学校教員の語いの強化を目指し，白画用紙を４つ折りにして卓上のネームプレートにできる形を想定し，名前記入用の１面を除く３面に１つずつ，自分を示す英語の単語を「赤で名詞（noun)，青で動詞（verb)，緑で形容詞（adjective)」を書き込むように英語で指示し，

まず教師のモデルを示した。実際にはその場でのティーチャートークであるが，以下はその指示・説明の例である。

（例）Now, look at my sheet. Can you see? Here's an example. In red, I wrote "allergy". It's a noun, 名詞. In green, I wrote "optimistic". It's an adjective, 形容詞です. In blue, I wrote "sing". It's a verb, 動詞ですね. Now, please choose three words that describe you. Describe, 述べる，説明するような単語ですね. After you finish writing the words, we will talk about ourselves using these words.

教師モデルの，この３語の選び方にも工夫があった。例えば，好きなものを名詞で挙げるのであれば，食べ物などを書くこともできるが，本実践では allergy（英語の発音はエロジーと聞こえる）を選んだ。日本語で言う「アレルギー」だが，まず英語での発音が日本語の音声とのギャップが大きく，耳から習得するのが望ましい。また，知っておくと便利な生活用語である。そして今回は，この語を取り上げ，自身がコロナ禍でマスクアレルギーになり，左の頬が腫れたエピソードを紹介し，コロナ禍での新しい生活様式につなげることを意図した。実践では，教師が自身のネームプレート用紙を示しながら，それぞれの語を紹介し，なぜそれを選んだかの理由を述べながら，英語でのやり取りを行った。受講者もそれに倣い，お互いに共感したり，質問したりして，授業開始から早い段階で，お互いコミュニケーション活動がスムーズに進められる素地を確立することができた。

⑵　エッセンシャルワーカーについての動画を使った授業・活動

Ice breakingに続き，担当する２コマのThemes/Goals（めあて）を以下のように提示した。１がテーマ①，２がテーマ②で，３は両方のテーマにかかっている。

1．Learn how Sesame Street introduces "what we can do in the COVID-19 pandemic" and reflect that to our life in Okinawa
2．Learn how Sesame Street tries to support the idea of diversity in a society and reflect that to our own situations
3．And, of course, learn new vocabulary, expressions, and use English in an enjoyable environment!

めあての提示後に，すぐ最初のテーマに入ったが，授業の展開は以下のように行った。まず，動画①の視聴前活動として，登場人物のGuessing gameを行った。受講者への配布資料には登場人物の写真は載せず，登場人物をイメージさせる色の画用紙（赤＝エルモ，ピンク＝アビー，青＝グローバー）を教室前の白板に貼りつつ，名前が出てきたら，名前入りの登場人物の拡大写真をその下に貼り付けて，名前の発音を確認した。またクラス全体への提示資料でも，登場人物の写真と名前を一旦提示した後，YouTubeの動画を流した。配布資料には歌のタイトル，リンクURL，長さの他に，歌の繰り返し部分の歌詞と，登場するエッセンシャルワーカーに使われているキーワードをあらかじめ掲載しており，動画視聴しながら，聞き取れた語句を文字でも確認し，後日自学習で意味を再確認したり，思い出したりできるように配慮した。図１は教室提示用の教師手持ちのスライド，図２はそれに対応する受講者のワークシートスライドを示している。動画に出てくる語いの中でも，stethoscope（聴診器）は生活語いであるにもかかわらず，英語上級者でもあまり知らない特徴的な語いであることから，教授用スライドには職業名に加え，この語いを掲載した。またセサミストリートのホームページ（教育・学習コミュニティ）にある，エッセンシャルワーカーへのサンキューカードのアイコンを，職業名を示す視覚補助として添えることにした。

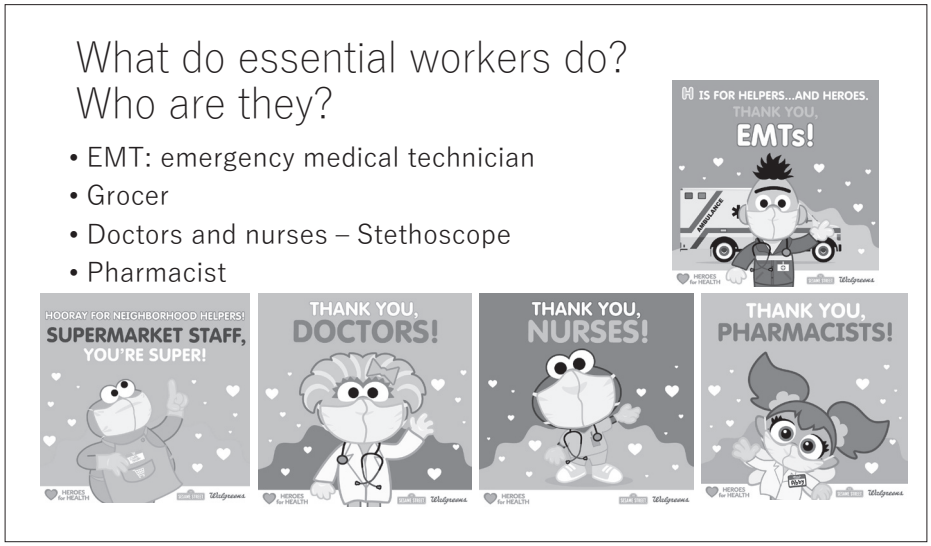

図１．Superheroes動画視聴教授用スライド

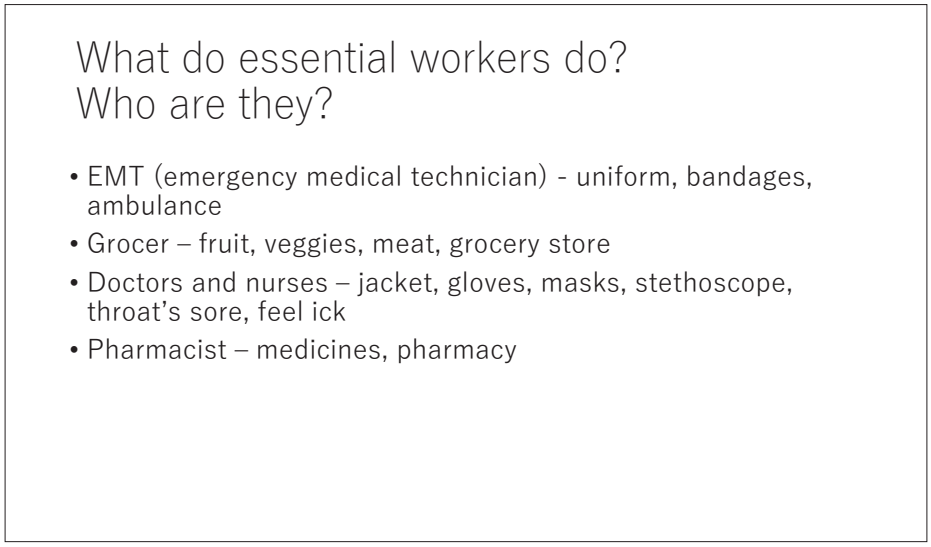

図２．Superheroes動画視聴受講者用配布資料スライド

実際のYouTube視聴は１回目通常速度で，英語字幕付きで行った。その後，教授用スライドの提示と配布資料を参照させながら，聞き取れた語句を中心に，英語のインタラクションにより内容理解を確認した。その後に，再度動画を視聴したが，その時に速度を0.75倍に落とした。最初に流したときに，視聴以前のコミュニケーション活動でやりとりしていた英語の発話速度と比較して，動画のスピードが速いのが気になったのが原因の，とっさの判断であったが，結果的に受講者からは「このくらいがちょうどよい」という反応があり，また「YouTubeでスピードが変えられることを初めて知ったのでよかった。今後の自分の勉強や，児童に見せる際にも活用したい。」とのコメントがあった。

視聴後の活動としては，動画に出現したエッセンシャルワーカーの英語名と関連する語句からさらに発展させ，「Who are other essential workers?」と問いかけてBrain stormをしながら，最終的には図１に挙げたような，セサミストリートのサイトで紹介されていたエッセンシャルワーカーを，イラストで紹介し，呼称を確認した。ここでの語いは，firefighter（消防士），social worker（社会福祉士），delivery driver（配達運転手），mail carrier（郵便配達員），hospital cleaning staff（病院清掃員），garbage collector（ゴミ収集員），warehouse worker（荷物倉庫作業員），child-care provider（保育士）

であり，普段は気づかないが，コロナ禍の状況で，社会が機能するために働いてもらっている人たちを英語で何と呼ぶのかを考えることは，現実世界と結びつくことから，動機づけの面においても，記憶の定着の面においても，効果的であると考えた。

ここまで，コロナ禍の状況について，動画を用いた英語の理解と表現のインプットを主眼とした活動を行った。それに続き，アウトプット活動として，①コロナの影響による生活の変化について，②変化した生活においても，感染が収束したらやりたいことについての言語活動を行った。①では「Do's and Don'ts: How did your behaviors change?」というテーマで，発表･やりとりを行ったが，場所（At home/At work）や相手（With my family/With my friends）を限定することで，内容を考えやすいように工夫した（図３のスライド参照）。

Do's and Don'ts (How did your behaviors change?)

At home	With my family
At work	With my fiends

図３．「コロナの影響による生活の変化」の言語活動（教授・配布資料共通）

ここでは英語を使いながら，自分の言いたいことを英語で表現しようとする受講生の熱心な取り組みが見られ，また受講者，教師共に，この境遇下での個々の生活や考えが情報共有され，発表されたことに対しての相槌やコメントも英語で自然に発せられていた。交わされた内容の一部を紹介すると，「学校では教諭も児童も，全員フェイスシールドをつけて授業を受けている。」→「よく皆フェイスシールドが入手できたね。」→「６年生は自分たちで100均で材料を買ってきて，みんなで手作りした。」→「ええーっ，すごい！」→「下級生の分は，上級生が作ってプレゼントしたんだよ」→「うわあ，もっとすごい！」といった会話を，日本語も多少交えながら，英語で表現していった。別の受講者は，「（職場からの感染予防のため）家に帰ったらシャワーに直行して，服も全部着替えてから，家族と過ごす」という発表があった。またWith familyでは，「家の近くの畑の道を子どもとゆっくり散歩することが増え，コミュニケーションが前よりも取れていると思う」というような，ポジティヴな経験の共有もあり，話に引き込まれて，英語の活動を教師自らも楽しむことができていた。

次に，②の「変化した生活においても，感染が収束したらやりたいこと」については，「What do you miss the most and why?」という質問に対する答えとして，それぞれの意見を発表してもらい，経験を共有した。教師は，受講者が「言いたいけど英語でうまく言えない」表現を拾い，それを英語に直して口頭で伝えて言ってもらう役割も担った。その中で，「映画はやっぱり映画館で見たい」という趣旨の発言をした１人の受講者に，教師が「I wish I were there.（そこに行けたらいいのに。）」という慣用表現を伝えると，この受講者はそれがとても印象に残ったらしく，書き留めながら，何度もそれを口頭で他のメンバーに伝える，という光景があった。実際，講習２コマ終了間際に「今日の１番の収穫

は何でしたか？」という教師の問いに対して，この受講者が「I wish I were there.（そこに行けたらいいのに。）という表現を習ったことです。」と答えたのが，とても強く心に残った。

なお，①と②の活動の間に，感染予防の観点から発話を抑えた授業計画の一環として，セサミストリートの「Practicing Social Distancing with Abby and Rudy」という，ソーシャルディスタンスについての２分程度の動画についても，配布資料にも載せて視聴の準備をしていたが，教室で十分な距離を取ることができた上で，言語コミュニケーション活動も活発だったことから，この教材は使わないまま，自宅での視聴を勧めるに留めた。時間はすでに２コマ目に入っていたので，テーマ①の内容はここまでで終了し，次のテーマ②に移行した。

４．２　２限目（テーマ②）

実際には，Warm-upを兼ねたIce breakingも含め，１コマ目の内容が時間を超過していたが，テーマ②「多様性への理解と受容」については，自閉症の女の子ジュリアとの出会いによって，異なる行動表現への理解と受容性を志向するYouTubeの動画を，教材の中心に据えていた。しかし，動画の英語を何度も聞き，それを単に覚えたり，繰り返したり，という言語活動ではなく，動画はあくまで内容理解を中心とし，それを題材として，多様な人間の理解につなげようという教師の意図があった。そのため，英語でのテーマの導入（タイトル）としては，自閉症という言葉は一切使わず「We're different, we're the same」とした。これは，1992年出版のセサミストリート絵本のタイトルでもあった。

⑴　多様性を「自分事」として捉える伏線としての視聴前言語活動

YouTube題材で取り上げる自閉症を単体で捉えるのではなく，誰もが持つ他との違い，個性の一種であるという観点を取り入れるため，動画を導入する前に２つのコミュニケーション活動を行った。１つ目は「I feel（形容詞）when …」の穴埋め口頭英作文で，（　）に入れる語として感情を表す基本的な形容詞であるhappy，sad，angry，scaredを与え，when以下の状況を考えて発表，説明してもらう活動であった。またこの活動では，図４が示すように，上記４つの形容詞に加え，さらに２つを，話し手が自由に選んで英文を作れるよう設定した。選択肢の例としては，前出の４つの形容詞よりさらに難しい語いであるポジティヴなcomfortable（快適な），peaceful（心穏やかな），relieved（ホッとする）や，ネガティヴなstressed（ストレスがある），frustrated（不満である），down（落ち込む）を提示し，より繊細な感情表現ができるよう心掛けた。図４に記入する時間を５分程度取った後に，教師も含めて

図４．「（形容詞）なのはこんな時」の活動スライド（教授・配布資料共通）

受講者全員で，どのような時に当該感情が沸き起こるのかについて，答えを共有する言語活動を行った。英語を話しながら，教師の英語は自然と「What makes you sad?」のような使役構文を取り入れていたが，全員が問題なく理解できているようであった。教師の「I feel angry when my husband doesn't listen to me.（夫が私の言うことを真剣に聞いてくれないと，腹が立つ。）」という発言には，受講者から共感にも似た笑いが上がるなど，英語を介してしっかり気持ちの表現の理解ができているようであった。

この活動では，様々な感情を引き起こす場面に個人差があることを，浮き彫りにするのが狙いであった。共感する共通部分は存在したが，活動中に出現した異なる回答は，その発言者の人となりをお互いがより深く理解するのに大いに役立った。最初のIce breakingにおいての自己紹介をはじめ，１コマ目の後半に取り入れた，ニューノーマルでの生活変化や，それでも失いたくない楽しみなどの回答と相まって，ここまでの活動で知り得た個々の回答ややり取りは，すべて受講者の多様性を示すものであったと言える。

Making a manual for yourself（トリセツ）

Me from outside	True Me

Please note when you deal with me …

図５．「私のトリセツ」を考える活動（教授・配布資料共通）

上記の活動を踏まえ，次に用意していたのは，「自分のトリセツを作る」活動であった（図５）。トリセツ（取扱説明書）は英語に直しにくい表現であったが，英訳の趣旨としては「他人が見ている自分（Me from outside）」と「本当の自分（True me）」を述べることで，自分だけが知るそのギャップを明らかにし，「自分と接するときは，こういうところに注意（Please note when you deal with me）」を埋めるという様式を準備した。先の言語活動（図４）では，ポジティヴ，ネガティヴな感情の形容詞を取り入れたが，それらの感情に結び付く状況（条件）を明確化することは，自分自身を喜ばせるにはどうしたらよいか，反対に，怒らせないようにするには周囲が何を避けるべきか，という情報を示すものである。これらを発展させると，「だから自分はこのように取り扱ってほしい（いわゆるトリセツ）」という情報に深化できる，というのが本活動の発想とねらいであった。

⑵　自閉症の女の子との出会いを紹介する動画を使った活動

前項の視聴前コミュニケーション活動を経て，自閉症の女の子ジュリアにビッグバードが初めて出会うエピソードを描いたYouTube動画を視聴した。言語活動におけるやり取りに時間をかけて進めていたため，実際にはかなり残り時間が気になるようになっていた。そのため，視聴後の理解確認のため用意していた３つの質問（Ｑ１ What's wrong with Julia? Ｑ２ Why was Bigbird sad? Ｑ３ What did Mr. Hooper do in order to support Julia?）に対しては，当初予定していたペアで時間を取っての確

認ではなく，視聴の前に聞き取るべき要点として提示し，視聴後には教師が受講生全体に問いかけて，出てきた答えを基に，すぐに動画内容の説明に入る形式を取った。しかしそれでも，動画内容の理解に重要となる登場人物と人間関係の紹介については，1つ目の動画の導入と同じく，キャラクターのイメージカラーを示す色画用紙を用い，赤（エルモ）とピンク（アビー）に加え，黄色（ビッグバード），オレンジ色（ジュリア），茶色（ジュリア）を示しつつやり取りを行い，白板に貼った色画用紙と人物の写真，そして教授用スライド資料を示しながら，名前を確認したうえで動画の視聴を行った。

図6は，受講者用資料に掲載した，内容理解を助け，覚えておくと使えると思える表現を載せたスライドである。

＜ Expressions ＞

1. I loves the way the paint squishes in my fingers. (Abby)
2. Take a look. (Alan)
3. May I see your painting Julia? (Big Bird)
4. [Giggling] (Julia)
5. She does things just a little differently in a Julia sort of way. (Abby)
6. How about tag? (Big Bird)
7. Tag, you're it! (Elmo)
8. *Boing Tag*
9. What's the matter? The siren's bothering you? (Alan)
10. I didn't mean to upset Julia. (Big Bird)
11. It's not your fault, Big Bird. Her ears are really sensitive. (Abby)
12. [Whimpering] (Julia)
13. Why don't we do some of your deep breathing, OK? (Alan)
14. Take a big belly breath **in** slowly. (Alan)
15. She's not like any friend I've ever had before. (Big Bird)
16. Each one is unique. (Big Bird)
17. Look who's feeling better. (Alan)
18. Oh, that's really kind of you. (Big Bird)
19. There's another thing you have in common. (Elmo)

図６．「ジュリアとの出会い」動画の主要表現集（配布資料）

次の活動の実施時間確保を考慮すると，10分の動画を２回流すのには無理があったため，視聴は上記のQuestionsに代表される聞き取るべき要点に注意を払ってもらい，英語字幕付きの標準スピードで１回視聴させた。図６の表現集は，教師による説明に用いることで，動画の概要が把握でき，受講者が帰宅後にYouTubeで本動画を見る場合にも，学習の手助けになるように，との目的があった。

自閉症を示す単語はautismで，決して易しい単語ではないが，Ｑ１の解答として口頭でautismと伝え，日本語の意味を尋ねたところ，受講者からはすぐ「自閉症」との声が返ってきた。動画で描かれたジュリアの行動を見れば，人とのコミュニケーションや情報の入力・出力に課題を抱えている子どもであることは容易に見て取れる。小学校の現場では配慮の必要な児童は増加傾向にあることから，本講習の受講者も日々，そのような児童に向き合っていると考えられ，その経験と知識は，動画の内容と重なり，内容理解の一助になったと考えられる。

なお，本動画ではジュリアの創作遊びであるBoing Tag（飛び跳ねながらの鬼ごっこ）を描いているが，YouTubeの動画にはジュリア独特の行動例として，手と手を合わせることでハグを示すStarfish Hug（ヒトデハグ）を紹介する３分程度の動画もあり，バックアップとして準備していた。しかし，時間の都合上割愛し，次のデジタル絵本の紹介を最後の活動とすることにした。

⑶　ジュリアのデジタル絵本「Circle of Friends（友達サークル）」

担当した講習の最後に紹介したのは，セサミストリートの教授・学習コミュニティの中にある「ジュリアのデジタル絵本：友達サークル」であった。配布資料には絵本のページを貼り付け，教室の音声を聞きながら，手元の資料と照らすことができるようにした。サイトでは絵本の読み上げ機能があり，自学習にも適している。教師側では図７のようなスライドを準備し，聞き取るべき（読み取るべき）ポイントについて示すようにしたが，時間の制約上，本講習では１度音声を流すデモンストレーションを行い，後は講習後の自学習に資するように配慮した。

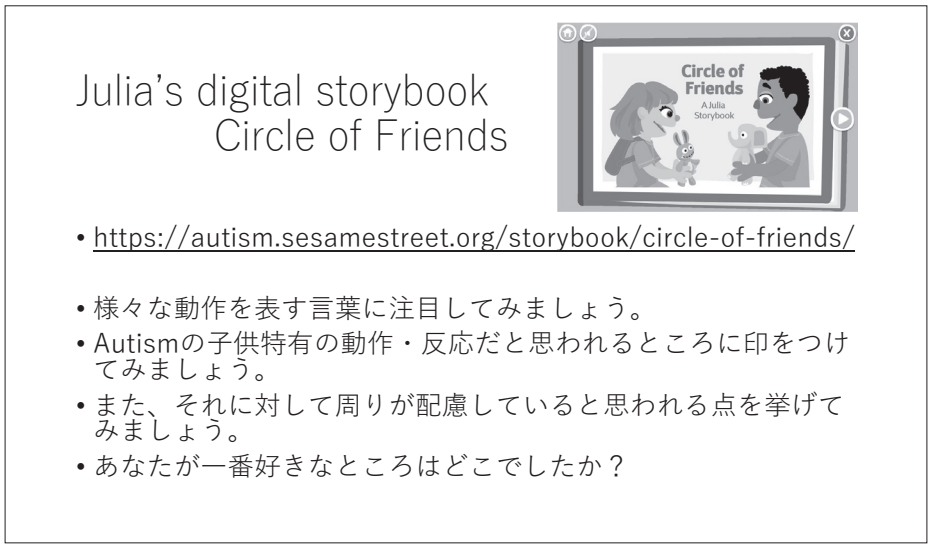

図７．「友達サークル：ジュリアのデジタル絵本」導入スライド
（教授・配布資料共通）

⑷　講習全体のふり返り

最後に講習全体のまとめとして，1. What word（s）/expression（s）did you learn today? Choose one or two and explain to class.（In what context was it used? Why did you choose that word/expression?）並びに2. How did you like *Sesame Street* materials and their educational purposes?の２つの質問を受講生に投げかけ，学んだことの共有を日本語で行った。再掲となるが，受講者からは「聴診器，stethoscopeという単語を初めて知った」，「I wish I were there.が心に残った。覚えてぜひ使いたい。」との発言があり，セサミストリートについても「とてもよい教材と思った。また復習して，自学習に役立てたい。」との声があった。

５．まとめ

本稿では，2020年８月12日に実施した中学校英語２種免許認定講習における「英語コミュニケーション演習」での実践を報告した。８月は沖縄県の感染状況が厳しいステージにあり，沖縄県教育委員会と連携しつつ初めて世話役を務めた認定講習であったが，８月の第１週，２週も予断を許さない状況で，特に大学はほぼすべての講義が遠隔のみになっていたことから，本講習での対面授業は多くの講師にとって久しぶりの対面授業という状況だった。筆者も実施時点で，対面での授業は半年ぶりであり，どの程度声を出させる活動をしてよいか見当がつかず，また３名の受講者ではペアワークもグループワークも，すぐに終わってしまうことを危惧していた。しかし実際には，十分やり取りの時間を確保できた。予想より実施の時間が押してしまい，授業で使わなかった教材が出てきたり，活動が駆け足になってしまったりしたのは，そのためである。

一方で，真正性，動機づけ，学習の自律と継続を意識したセサミストリートのYouTube教材を用いた授業設計と実践は，小学校教員を対象とする英語コミュニケーション科目において，極めて適切であると実感した。少人数クラスでじっくりと，コロナ禍での生活や学校での状況を英語で語ることができた言語活動は，教師にとっても貴重な体験となった。YouTubeの動画を中心に対面授業を設計するのは，初めての試みであったが，インターネット上の英語による動画は，教材の宝庫であることを痛感した講習であった。今回は録画・録音もせず，学習者側のデータも収集しなかったことから，十分な分析をするには至らなかったが，今後，このような教材やタスク並びにその効果について，さらに研究を深めていきたい。

文　献

Harmer, J., 2015, *The Practice of English Language Teaching* (*Fifth edition*), Harlow: Pearson.
Kates, B., 1992, *We're Different, We're the Same*, New York: Random House Children's Books.
文部科学省,「令和元年度『英語教育実施状況調査』概要」https://www.mext.go.jp/content/20200715- mxt_kyoiku01-000008761_2.pdf, (2020/10/2).
セサミストリートワークショップ，2020,『セサミストリートキャラクターブック』東京：小学館.
東京学芸大学，2015,「英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業」『シンポジウム報告書』，http://www.u-gakugei.ac.jp/～estudy/report/index.html, (2020/10/2).